

戦後初期の大村はま話しことば学習指導に関する 一考察

— 教育図書発行『國語中学校』の無署名教材を中心に —

伊 木 洋
(2020年10月5日受理)

A Consideration of Hama Omura's Listening and Speaking Learning Instructions
in Early Post-war

— Focusing on the unsigned teaching materials of educational book published
“Japanese Language Junior High School” —

Hiroshi Igi

Abstract: In this paper, I paid attention to unsigned teaching materials of first post-war Japanese language official textbook “Japanese Language Junior High School” for the junior high school, which Omura was involved in editing. I examined it by comparing it with the unsigned teaching materials of the textbook “Junior High School Comprehensive Japanese Language” issued by the educational book involved and the practice records by Omura and the learning records written by learners in the Omura Classroom. In the process of forming Omura's listening and speaking learning instruction in the early stages of the post-war period, unsigned teaching materials in “Japanese Language Junior High School” envisioned learning instruction that incorporates the listening and speaking learning instruction in the learning instruction of writing in the learning guide. After that it was clarified that in “Comprehensive Japanese Language for Junior High School”, the direction of learning instruction was clearly positioned in the comprehensive unit.

Key words: Hama Omura, listening and speaking, Japanese language junior high school textbook, “Japanese Language Junior High School”, “Junior High School Comprehensive Japanese Language”

キーワード：大村はま, 話しことば, 中学校国語教科書, 『國語中学校』, 『中学総合国語』

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、大村はまが編集に関わった教育図書発行の国語教科書『國語中学校』（第一学年用1948、

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：山元隆春（主任指導教員）、間瀬茂夫、
難波博孝

第二・三学年用1949)の無署名教材に注目し、同様に大村が編集に関わった教科書『中学総合国語』(1951)の無署名教材及び大村による実践記録や大村教室の学習者が記した学習記録と照らし合わせて検討することを通して、戦後初期における大村はま話しことば学習指導の形成過程を明らかにすることである。

昭和20年代における大村はま話しことば学習指導については、山元(1990)によって教科書教材を用いた授業の検討が行われている。山元(1990)は文部省発行『中

等國語』(1947)の教材「やさしいことばで」及び教材「クラーク先生」を用いた授業、「単元クラス雑誌の編集」、『中学総合国語』(1951)の教材「研究発表」に依拠した「単元研究発表」の考察を通して、昭和20年代における大村はま話しことば学習指導を「話し合い」の経験を重視した話しことば指導の当時の一般的問題点を改善する過程」(p.53)ととらえ、次の3点に関して言及している。1点目は指導法に関して「話し方の一般的知識をふさわしい時期に与え、同時に話すことそのものを即時的に教えるという2方向からの指導を行い、それぞれの方法を追求していったこと」(p.53)、2点目として話しことば指導を成立させる条件に関して「話し合い、発表活動の前段階に、実に充実した、また程度に関しても周到に配慮された書く活動、読む活動が存在していること」(p.53)、3点目に話しことば指導を切り拓く着眼点に関して「ことばの響きやちょっとしたニュアンスに話し手の心を読み取る(中略)分析態度が大村氏の話しことば指導の根底に存在して」おり、「話しことば指導は、ある面で心のあり方にまで関わる人間性の陶冶に他ならないという、話しことば指導を貫く基本認識」(p.53)がみられることである。さらに山元(1990)は、大村が「経験活動(場)を損なわずに、かつ指導の手も加えられる学習活動」を求め、「話しことば指導の内容と系統を『生きた場』のままに構築する方向に進んでいった」(p.55)ことを明らかにしている。

山元(1990)は、昭和20年代における大村はま話しことば学習指導の形成過程に関して、『中等國語』の教材「クラーク先生」を用いた授業の考察を通して「大村氏のこの時期の授業は、教科書教材を軸に話し聞くことよりむしろ書くことを学習の中心としているように思われる。話しことば指導は、話される対話やことばの裏に潜む人間への鋭い洞察力に支えられつつ、形態的には戦前の学習においてもみられるような発表形式の、いわゆる人前で話すスピーチの指導を中心とするものであった」(p.52)と述べている。ついで、山元(1990)は、大村教室の話しことば学習指導実践が一步発展したのは、カードによる指導法を開発し討議指導の原理を発見していった「単元クラス雑誌の編集」実践であり、さらに、その後、『中学総合国語』(1951)の教材「研究発表」に依拠しながら指導を行った「単元研究発表」において、小黒板を用いて「生徒全員に向けて、話の筋をはずさせない、また、話し合い学習の意識を持たせ」(p.52)つつ、「読みの学習に付随した話し合い学習という認識から、充実した話し合い・発表のためには、話す内容を生徒に持たせるための前段階の指導が不可欠であるという認識への転換」(p.53)

が図られたと指摘している。

本研究では、大村が編集に関わった戦後初の新制中学校用検定教科書の一つである教育図書発行『國語中学校』(1948, 1949)の無署名教材に注目する。『大村はま国語教室別巻』(1983)には大村が編集に加わった教科書・指導書等が一覧として整理されているが、一覧には『國語中学校』が記載されていないこともあり、大村がこの教科書の編集に関わったことはこれまでほとんど注目されることがなかった。しかし、大村が編集に関わった教科書『國語中学校』の無署名教材には、大村の話しことば学習指導と関連性が深いと考えられるものがある。山元(1990)は教科書の教材を用いた授業の検討によって昭和20年代における大村はま話しことば学習指導が総合的な単元の中に明確に話しことば学習指導を位置づけた学習指導へと進んでいったことを明らかにしているが、大村が編集に関わった全ての教科書には目が向けられていない。そこで、これまで大村はま話しことば学習指導に関する研究で取り上げられてこなかった、『中等國語』(1947)と『中学総合国語』(1951)の間に位置する『國語中学校』(1948, 1949)に注目して検討することを通して、どのような話しことば学習指導が行われ、どのような形成過程を経ていったのかということをも明らかにしていく。

無署名教材に関して、吉田(2001)は『中等國語』の無署名教材の多くは編集に関わった石森延男が書き下ろしたもので、「内容的には戦後民主社会のありようを求めたもの、また、ジャンルとしては表現教材(生徒作文)を積極的に導入しようとした点に、一つの特徴を見いだせる」(p.496)と述べ、当時の教科書教材における無署名教材に編纂者の考え方が色濃く反映されていたことを指摘している。

『中等國語』を参考に作成された『國語中学校』の無署名教材も編集委員の考えが反映され、単元を中心とする言語活動を組織して作成された特徴的な教材であったと考えられる。『國語中学校』全9冊(各学年3分冊)の中に掲載された無署名教材は次の3教材である。

- 「夜あけ」 『國語中学校第一学年用一』
- 「日記」 『國語中学校第一学年用三』
- 「クラス雑誌」 『國語中学校第二学年用二』

新制中学校の国語科担当教諭として編集に関わっていた大村は、実践をふまえて無署名教材の作成に関わったと考えられるが、本研究では、大村実践との関連が確認できた「日記」及び「クラス雑誌」を取り上げて検討を進めることとする。「日記」及び「クラス雑誌」に関しては、『中学総合国語』にも無署名教材として「日記」及び「クラス雑誌を作る」が掲載されており、

比較検討することによって形成過程を明らかにすることが可能である。さらに、「クラス雑誌」及び「クラス雑誌を作る」に関しては、大村(1982)による実践記録「単元クラス雑誌」や学習記録との関連性を検討することによって、大村はま話しことば学習指導の形成過程をきめ細かく考察することができると考える。

2. 研究の対象について

教育図書発行『國語中学校第一学年用一・二・三』は、1948(昭和23)年に発行された戦後初めての新制中学校検定国語教科書の一つである。『國語中学校第二学年用一・二・三』と『國語中学校第三学年用一・二・三』は、翌年の1949(昭和24)年に発行されている。

教材「日記」に掲載されている『國語中学校第一学年用三』(1948)の著作者は教育文化研究会代表者金森徳次郎と記されており、奥付には教育文化研究会主幹として石山脩平、国語科編集委員は長谷川敏正、渡辺茂、飛田隆、鳥山榛名、和田邦五郎、宮崎健三、稲村テイトともに、大村は新制中学校教諭としてはただ一人東京都江東区立深川第一中学校教諭として国語科編集委員に名を連ねている。

1948(昭和23)年に発行された『國語中学校第一学年用三』発行当時の大村(1983b)は、戦後の混乱の中、「新しい時代のしあわせのために、何かしたい」(p.367)という悲願のようなものを抱えて、東京府立第八高等女学校から1947(昭和22)年5月に深川第一中学校に移り、焼けただれたコンクリートの校舎で新制中学校における国語教室を出発させていた時期であった。大村(1983)は「知恵と力とをふりしぼっている間にわかったこと、一すさんだ生徒たちに「学習」ということをさせる方法、それは、とにかく、自分で、ある目的の、何かの作業をさせることであった。受け身の姿勢を、自分からやろうという姿勢に変えられたとき、それだけの魅力ある作業をくふうすることができたとき、かれらは、また、なんと、いっしょうけんめいに、その仕事に打ち込むものか。」(p.368)と大村単元学習が生み出された実情を記している。

当時の大村は、1948(昭和23)年に開催された中学校教員再教育指導者養成協議会東京大会に東京地区代表者として参加し、経験主義に基づく新制中学校教育の理念や学習指導法を吸収している。また、大村(1983)は『中等國語』を教材とする文部省『通信教育学習書』を作成する委員の一人となり、GHQ指導のもと単元という考え方について「たいそう教えられ鍛えられた」(p.254)と述懐している。さらに西尾実の推薦によって

『昭和26年改訂版中学校高等学校学習指導要領国語科編(試案)』(1951)の編修にも関わっていった。

『國語中学校第二学年用』及び『國語中学校第三学年用』が発行された1949(昭和24)年には、大村は東京都目黒区立目黒第八中学校の所属となっており、1949(昭和24)年9月に東京都再教育講習会において研究授業「クラス雑誌の編集」を行っている。

戦後初の中学校用検定国語教科書『國語中学校』は、国定教科書『中等國語』をふまえて編集されたと考えられる。教材は読むこと、書くことを中心としたものとなっているが、各教材には学習の手引きが付けられ、学習の手引きには話し合う活動が示されている。

学習の手引きに関して、吉田(2001)は、1947(昭和22)年に発行された『中等國語』にはなかった学習の手引きが、1948(昭和23)年の修正版の『中等國語』の巻末に一括掲載され、1949(昭和24)年の三訂版の『中等國語』では各教材の末尾に掲載されたことを指摘し、CIEの指導のもとに作成された昭和22年版『学習指導要領国語科編(試案)』の「参考一」に示された経験主義に基づく「単元を中心とする言語活動の組織」に対応するために学習の手引きが必要であったことを明らかにしている。(pp.549-572)。

吉田の指摘をふまえると、初の検定教科書であった『國語中学校』においても、経験主義に基づく「単元を中心とする言語活動の組織」を重視した単元編成が重視され、各教材に学習の手引きを付け、単元的展開の実現が目指されたと考えられる。山元(1989)は『國語中学校』の特徴について、「一教材一単元としている点で過渡期的な性格が指摘できる。がそれと同時にいくつかの教材をまとめて一つの単元とする現在の教科書にもみられる方式が、この段階で既に見られる」(p.156)と述べている。吉田(2001)も『國語中学校』に関して、「教育図書発行の『国語』は、基本的に単元による編成法を採っていたが、部分的に一教材一単元を残したものであった」(p.665)と、単元による編成が行われたことを指摘しており、単元的展開を重視した『國語中学校』の編集の場に大村が身を置いていたことが、大村の話しことば学習指導の形成過程に影響を与えたことは想像に難くない。

教育図書発行『中学総合国語』(一～六、各学年2分冊、計6分冊)は、1951(昭和26)年に発行された中学校検定国語教科書である。『中学総合国語第一学年用一』(1951)の著作者は教育文化研究会代表者金森徳次郎と記されており、奥付には教育文化研究会主幹として石山脩平、編纂委員として飛田隆、宮崎健三、渡辺茂、教育図書編集部とともに、大村は東京都目黒区立第八中学校教諭として名を連ねている。

山元(1991)は『中学総合国語』の特徴について、「ほとんどの単元が、ある教室の学習活動—それは発表会であったり対談であったり、ある時間の自由な会話であったり—の流れによって示されている。これを別の面から評価するならば、話しあいのモデルを示し、文字による教科書に聞くこと話すことの学習を積極的に持ち込んでいる工夫として評価できよう。」(p.120)と述べ、さらに「学習展開そのもののモデルを提供して、国語教室における学習活動の具体的な呼吸を示しつつ、同時にその学習に必要な資料も多角的に用意し、その資料の扱いの軽重も多様な様相を呈している。」(p.120)と記している。

『中学総合国語』発行前後の大村(1983)は「たかさんの研究授業をした」(p.368)と記しており、前述した『昭和26年(1951)年改訂版中学校高等学校学習指導要領国語科編(試案)』の編修に関わりながら、研究授業を行い、その成果を学習指導要領や『中学総合国語』の教材に生かしていったと考えられる。

3. 『國語中学校』及び『中学総合国語』における教材「日記」の検討

3.1. 『國語中学校』における教材「日記」の検討

『國語中学校第一学年用三』(1949)の教材「日記」(pp.15-20)は、この教科書の第四教材として示されている。この教材について大村が作成に深く関わったと考える根拠として、筑摩書房発行『国語一』(1961)の教材「日記から」の内容との重複があげられる。教材「日記から」に取り上げられている「O君の日記」のうち1日目、2日目、3日目の記述(pp.56-57)は、『國語中学校第一学年用三』(1948)の教材「日記」の2日目、7日目、8日目の記述(pp.17-19)と全く同じものである。しかも、筑摩書房発行の教科書『国語一』(1961)の「国語学習指導の研究一」には、この日記の作者と出典について「作者 東京都江東区深川第一中学校生徒、出典 学級文集」(p.91)と明記されており、『國語中学校』の教材「日記」は、深川第一中学校に勤務していた大村が関わって作成されたと考えられる。

『國語中学校』の教材「日記」は書くことが主たる学習であるが、1日目の日記には、次のように話しことば学習指導につながる記述が見られる。

四 日記

この課は生徒の日記である。毎日の生活がどのように書かれているかを読みとろう。そして生活を深めるような日記をつけてみよう。

月 日

きょう、國語の時間に、藤村の文章を、自分で勉強するとして、どんな問題をしたらよいかについて話し合い、とてもおもしろかった。「おもちゃは野にも畑にも」について、石井君が、「このように自分らも、身のまわりのものをくふうして、おもちゃを作ってみるとよいと思います。」と言い出した。これについて、いろいろの意見が出た。

山田「作ってもいいけど、國語の勉強にはならないと思います。」

野田「作ってみて、その作り方を書いたりすれば、ことばの勉強になると思います。そういう作り方の説明の文などだけいこするのも、たいせつだと思います。」

山田「でも、作らせるために書いた文でないから、勉強の中心が、それだと思います。」

野田「いちばんたいせつな問題ではないと思います。けれど、作ることによって、とてもあたたかいというような、静かな喜びを味わえるので、この文の気分にもふれたことになると思います。」

山田「そういう時は、その心持を、何かの形で、ことばに表わしてみなければ、意味がないと思います。」

ぼくの出した問題は、「よい文を集めて、『ノートの中から』とある、そのノートのような文集を作る。」というのであった。「集めただけでも勉強になるか。」「集めただけ」といっても、集めるためには、いろいろさがしたり読んだりもするし、考えるから勉強になる。」「書けば、感想も出てくるから、それも、きれぎれでも書いておくとよい。」「さし絵なんか入れても、おもしろいと思う。」などの意見が出た。おかしかったのは、伊東の「落ち葉」に似た文を書くというのに対しての話しあいだった。

「まねというと、言い方が悪いけれど、そのような材料で書くのです。そして、比べてみるのです。」「だって、比べたら、どうせへたに決まってる、相手は文豪藤村じゃないか。」

「そういう意味で比べるのではないと思います。自分の書きにくかったところなどを、しるしておいて、そういうところをどのように書いているか、みることだと思います。」

みんなこれにさんせいした。(p.15-17)(中略)

【学習の手引】

- (1) この日記の文体について考え、読後感を話しあう。
- (2) 九日間の日記に、どんなことが書かれているかを考え、短いことばで箇条書にしてみる。
- (3) 日記を書くことが、どのように生活に役立つかを

話しあってみる。

- (4) 生活を深めてゆくような日記をつけてみる。
 (5) できれば、すぐれた人々の日記を読む。(p.20)

この教材は、中学生によって書かれた日記という形式を用いて、編集委員であった大村が関わって作成されたと考えられる。中学生によって書かれた日記という形式で教材を作成するという方法は、『中等國語一』の第七教材「日記から」と共通しており、『中等國語』をふまえて教材として取り入れたと考えられる。

『國語中学校』の教材「日記」独自の大きな特徴は、書くことの学習指導の教材の中に、国語の時間の話し合いの場面が、話しあっていることばで示されていることである。「藤村の文章を読んで自分で勉強するとして、どんな問題をしたらよいか」という話題が取り上げられ、文章を読んで実際におもちゃを作ってみるという活動が、国語の勉強、ことばの勉強、書くことの勉強になるかということが話し合われている。ついで、「よい文を集めてノートのような文集を作る」という問題に対して国語の勉強になるかという観点からさまざまな意見が出されたことが示されている。さらに、『落ち葉』に似た文を書く」という問題に対する話し合いのようすが具体的に提示されている。ここでは、「だって、比べたら、どうせへたに決まってる、相手は文豪藤村じゃないか」といった一つ一つの意見が、実際に教室の中で話し合いが行われているように描かれており、話し合いの具体的なイメージを持たせるような書き方になっている。実際に教室の中で話し合いが行われているような形で示すという方法は、学習者に話し合いのイメージを持たせやすいという効果があるため、大村が話し合いの学習指導においてくりかえし用いた台本型の手引に通じるものがある。

注目したい点は、伊東の「落ち葉」に似た文を書くという提案に対する日記の内容である。藤村と比べたらへたに決まっているという意見に大笑いになったが、「自分の書きにくかったところなどを、しるしておいて、そういうところをどのように書いているか、みる」という表現のモデルとして比べてみるという伊東の意見を聞いて、みんなが賛成したという記述は、意見を出し合い、話し合うことを通して新たな合意を生み出していくという構成となっており、日記の内容が話し合いの一つの具体的なあり方を示すものとなっている。

学習の手引(3)「日記を書くことが、どのように生活に役立つかを話しあってみる。」には、日記を書くことの意義を実際に話し合う言語活動が設定されている。日記に示された話し合いの内容は、学習の手引き

にそって実際に話し合う場面で、どのように自分の考えを提案し、意見を出し合い、日記を書くことの意義を見いだしていくかというイメージを持たせるものとなる。

以上のように、『國語中学校』の教材「日記」では、学習の手引きによって日記指導に話し合い活動が取り入れられている。しかも、教材「日記」の内容が話し合いの一つの具体的なあり方を示すものとなっており、学習者に話し合いのイメージを持たせるものとなっている。学習の手引きによって日記を書くことの意義を話し合い、実際に日記をつけるという書くことを主とした単元的な展開の実現が目指され、その中に話しことばの学習が組み込まれている。

3.2. 『中学総合国語』における教材「日記」の検討

次に『中学総合国語第一学年用一』(1951)の教材「日記」(pp.192-222)について検討を進める。この教材には、大村教室の生徒による作品が掲載されている。「運動会の日記」(p.216)の作者は大村教室で「単元クラス雑誌」に取り組んだ学習者の一人である中野忠である。また、生徒による運動会の新聞「K中タイムス号外」(pp.217-219)には責任者羽島健之と記されているが、大村教室における新聞の学習をもとに運動会の新聞を発行したという羽島知之の関わった運動会の新聞が元となっていると思われる。『中学総合国語指導の研究第一学年用全』(1951)の「日記」に関する資料の「教科書について」には、「中野忠 新聞班という特別の仕事をしている者として。(中略)なお、この号外は、題名の外は実物のまゝである。」(p.59)と記されている。こうした点から、『中学総合国語第一学年用一』の教材「日記」には大村が関わったと考えられる。

教材「日記」は、「日記」を書くことを話題とした2つのグループの発表によって構成されている点に特徴がある。第1グループの発表は「日記に書くことがら」、第2グループの発表は「日記の書きかた」である。実際に日記を書く際に問題となる「何を」「どのように」書くかということを、中学生が実際に発表していることばで示す形で「日記」の教材が作成されている。

第1グループの発表「日記に書くことがら」では、個人の生活記録としての日記を取り上げることとし、自分の日記に書いてあることがら、文集などに見られる日記に書いてあることがら、文学者などの全集による日記の内容、父母その他の人々に日記に書くことがらについて問いを出して答えていただいたことなど、調べたことをまとめて発表が進められている。発表では、1月日曜日、2天気・気候、3その日のおもなできごと、4他人との約束、交際、5感じたこと、考えたこと、6手紙、7その日読んだ本や新聞雑誌のこと、

8計画、予定の8項目が取り上げられ、実際に発表した話しことばで発表が具体的に示されている。また、発表の中に文学者の日記や中学生による日記が具体例として取り上げられている。

第2グループの発表「日記の書きかた」では、どういふ日記がよい日記か、2つの方面から考えたことを6項目にまとめて発表が行われている。1つの方面は書く自分自身を育てるのに役立つようにということであり、もう1つの方面は実際の役に立つようにということである。この2つの方面から、1じょうずへたを忘れて自由にぐんぐん書く、2ありのままに書く、3ことがらを選んで書く、4平凡のようなことにも新しさを見つけて書く、5時・場所・名まえをおとさずに、6毎日時間を決めて書くという6項目の日記の書きかたについて発表がなされている。その後前述したように日記の例として運動会の日の日記集から生徒の日記が具体的に示され、運動会の日に新聞班で号外を発行したという日記に即して、発行した新聞の具体例が示されている。

この教材は「日記」という「書くこと」を中心とした単元であるが、さまざまな言語経験を豊かに経験させることが目指されており、教科書巻末の「単元と言語経験の表」では、「聞くこと」「話すこと」における言語経験として「経験発表」「話しあい・討議」「司会」の3項目が取り上げられている。

『中学総合国語第一学年用一』の教材「日記」においては、発表という言語活動が教材の中に示されており、総合的な単元の中に話しことば学習指導を明確に位置づけた単元が構想され教材化されている。

3.3. 『國語中学校』の教材「日記」の位置づけ

大村が編集委員として関わった二つの教科書『國語中学校』及び『中学総合国語』の無署名教材「日記」に注目してみると、学習者の実態を大切にしながら、学習指導要領の記述に基づく時代の要請をふまえて単元的な展開の実現が目指されている。『國語中学校』の教材「日記」では、日記を書くことを主とした学習の中に、学習の手引きという形で話し合い活動が組み込まれている。しかも、日記の内容が、実際に話し合いを行う際に具体的なイメージを持たせることができるよう構成されている。『中学総合国語』の教材「日記」では、総合的な単元としてグループで発表する活動が教材の中に示されており、総合的な単元の中に話しことば学習指導を明確に位置づけた単元が構想され教材化されている。こうした考察から、学習の手引きによって書くことの学習指導に話しことばの学習指導を組み込んだ『國語中学校』における教材「日記」は、総合的な単元の中で話しことば学習指導を行う方向を示し

た『中学総合国語』の教材「日記」につながっていく前段階を示すものとして位置づけることができる。

4. 大村実践「単元クラス雑誌」、『國語中学校』の教材「クラス雑誌」、『中学総合国語』の教材「クラス雑誌を作る」の検討

4.1. 大村実践「単元クラス雑誌」について

『大村はま国語教室第1巻』の「私の研究授業一覧」によれば、大村は1949（昭和24）年9月、東京都再教育講習会において、目黒区立第八中学校2年生を対象として研究授業「クラス雑誌の編集」を行っている。大村（1982）は、この研究授業のあらましに「討議の指導に本気で取り組んだ最初の単元。この編集会議は、カードを使って討議を指導する試みの第一歩。カードによる討議記録の方法を実施した。」（p.480）と記しており、大村はま話しことば学習指導において重要な実践の一つとして位置づけられる。

「単元クラス雑誌」に関しては、『大村はま国語教室第1巻』に大村（1982）による実践記録（pp.139-172）が掲載されており、この実践記録には、大村がカードを使って実際にクラス雑誌の指導を行った編集会議の討議記録（pp.158-164）が掲載されている。実践記録には「昭和26年2月目黒区立第八中学校2年A組」と記されているが、実践記録に記されている学習者の一人、原優子（昭和24年度当時目黒第八中学校2年A組）の学習記録「単元学習帳 級雑誌の作り方」（1949）と照らし合わせると、この実践記録では1949（昭和24）年の実践が取り上げられていると考えられる。¹

また、大村（1982）が記した『大村はま国語教室第1巻』「単元学習の生成」にも「クラス雑誌」に関する記述があり、大村はここでもこの単元で「討議」ということを初めて本気で考えた（p.55）と記している。この記述にも「昭和26年目黒区立第八中学校」と記されているが、展開の実際は前述の実践記録を参照と但し書きが付されており、この記述に関しても1949（昭和24）年の実践に基づくものであると考えられる。この記述（p.55-59）には、討議という方法を使ってほかの学習を進める場合と討議のしかたそのものを教える場合とを区別して考えなければならないこと、討議そのものを教えるときの題目（話題）として、その題目をめぐってゆたかなあふれるような内容を持っていることがどうしても必要であること、カードを使って発言内容を持たせる指導やカードを書いて渡して発言の機会を知らせる指導、機会をとらえて話を転換する指導等の討議そのものを教える指導を行ったことなど話しこ

とば学習指導における重要な指摘が示されており、前述の研究授業のあらましと合致している。

4.2. 実践記録「単元クラス雑誌」及び『國語中学校』の教材「クラス雑誌」の検討

ここで注目したいことは、研究授業「クラス雑誌の編集」が行われた時期と同じ時期に、大村が編集に関わった教育図書『國語中学校第二学年用二』(1949)が発行されていることである。

前述した大村(1982)による「単元クラス雑誌」の実践記録によると「私の使用していた教科書に、そのころ短期間出していた児童雑誌「世界の子供」からとった「クラス雑誌」というのがあった。私はこれに、文字どおり、とびついた。やりたくてたまらなくなった。」(p.139)と記されている。『國語中学校第二学年用二』の教材「クラス雑誌」は児童雑誌「世界の子供」によることが教材の末尾に明記されていること、『國語中学校第二学年用二』の教材「クラス雑誌」を手書きしたプリントが前述の原俊子の学習記録「単元学習帳 級雑誌の作り方」(1949)に綴じられていることから、『國語中学校』の教材「クラス雑誌」が1949(昭和24)年の実践「単元クラス雑誌」の契機となったと考えられる。

教材「クラス雑誌」は『國語中学校第二学年用二』(1949)に無署名教材として示されている。『中等國語』には「学級日記」は掲載されているものの「クラス雑誌」という教材は掲載されておらず、『國語中学校』において独自に作成された教材であると考えられる。

國語中学校第二学年用二』(1949)教材「クラス雑誌」から、話しことは学習指導に関わる教材の冒頭と編集会議に関する部分と学習の手引きを取り上げてみる。

三 クラス雑誌

クラス雑誌を作りましょう。この楽しい仕事をすのあいだに、さまざまな國語の勉強ができ、いろいろの力がついていきます。

クラス雑誌といっても、たとえば学校の一つのクラスだけで出す狭い意味のクラス雑誌もあり、学校全体で出す校友会雑誌(スクールマガジン)もあり、また気の合ったものが寄り集まって出す同人雑誌もあるわけです。ここでは、そういうものを全部ひっくるめてお話ししましょう。(中略)

(2) 編集会議と原稿集め

原稿を集める前に編集会議を開きます。編集会議には編集部員はもちろんのこと、先生がたや先輩たちが加わることもあるでしょう。この会議で、どんなものを雑誌に載せるかということを決めます。小説や詩や旅行記を一般生徒から募集して、その中

のいいものを選ぶのもこの編集会議で決めるわけです。また運動部のキャプテンにそのシーズンの記事を書かせるとか、先輩たちからの特報を集めるとか、いろんな計画を立てます。学校の雑誌であるから学校以外の社会の記事を集めることはつしまねばなりません。また上級生におもしろくないという理由で、一年生向きの笑話を排斥するのもいけません。下級生が編集部員に加わっているのだから、かえって下級生を力づけてやるようにしむける必要があります。それからもう一つ注意すべきことは、人の悪口を書いたり、ひにくったりするような記事はようしゃなく「没」にすることです。学校で恥をかいたことは一生その人の心の傷となるものです。(p.12-14) (中略)

【学習の手引】

- (1) クラス雑誌の作り方の要領をまとめる。
- (2) クラス雑誌として、どういうのがよいか、いろいろの点について自分の考えを書く。
- (3) クラス雑誌を作る。
- (4) クラス雑誌を作る時、その計画の初めから、終わりまでの記録を書く。(p.16)

教材「クラス雑誌」は、クラス雑誌の作り方が示された教材であり、引用部分では編集会議と原稿集めのポイントが示されている。学習の手引(3)には、「クラス雑誌を作る」とあり、クラス雑誌の作り方を知識として知るだけでなく、実際にクラス雑誌を作る言語活動が示されており、経験主義に基づく学習者主体の学習指導として単元的展開ができるよう工夫されている。

『國語中学校』の教材「クラス雑誌」を契機とした学習指導に関する大村の考えは、大村(1982)による実践記録「単元クラス雑誌」の次の記述に表れている。

何がそんなにも心を引いたのであろうか。まず、聞く話す読む書くが、みんな入る、と思った。それもごく自然な、必要の場であって、と思った。目標が具体的で、自分たちの勉強、努力がはっきりと形になる、これはいい、と思った。文集でなく、雑誌である、いろんな文章が入れられる。笑いが入れられる。力の弱い子がいても、ちっとも困らない、何かをおもしろく書かせて必ずどこかのページにその座を持たせられる。編集会議……絶対必要な討議、小さな発言の機会のいくらかでもある討議。原俊子と大原喜治と、さざりあうであろう。羽島知之、こつこつと、はじから記事を書くだろうな。加藤真理子、長いのを載せると言い出すだろうな。中

野忠、議論が沸くと、両手をあげて静めながら、「高津君、ご意見をどうぞ」と、気弱な子を促すだろうな……。」(p.139-140)

ここには、『國語中学校』の教材「クラス雑誌」を契機として、大村が学習者一人一人の姿を目の前に描きながら単元を構想していることが示されている。雑誌を作るという言語活動について、大村(1982)は実践記録の学習指導案「クラス雑誌」の単元設定の理由に「1 雑誌は、生徒の生活と切り離せないものであり、生徒の興味の中心の一つである」(p.140)と記しており、ここには学習者の興味を重視して単元を設定するという学習者主体の考え方が示されている。

「聞く話す読む書くが、みんな入る」という記述に関わる単元設定の理由として、大村(1982)は学習指導案に「3 クラス雑誌を作るには、さまざまな作業があり、いろいろな場のいろいろな言語技術の学習と指導の機会が、とりわけてゆたかにある。各種類の各段階の生徒が、それぞれ個性に応じ能力に応じて、力いっぱい活動しやすい。また、いろいろの面の創意が生かしやすい。」(p.140)と記している。ここには、クラス雑誌をつくるという総合的な言語活動が、個性に応じ能力に応じて活動しやすく、創意を生かしやすいことが示されており、学習者主体の学びにふさわしい言語活動であることが明示されている。

大村(1982)による実践記録「単元クラス雑誌」の「クラス雑誌の名まえを決定する」話しあいの記録には、クラスがどんどん伸びていく名まえとして「若竹」「あゆみ」がよいという発言やクラスの繁栄という線に沿って「山びこ」「鏡」「朝日」がよいという発言がなされたことが記されている。また、「私たちのクラス雑誌」というクラス雑誌をどんなふうについたらよいかという話題についてのグループ討議は、カードを用いた記録が作成され、原倭子の司会により、第一に名まえ、次にどんなものをどのくらい入れるかについて行われた話しあいのようすが具体的に記されている。

話し合いの記録をもとに、クラス雑誌の内容について娯楽を入れることに関する発言を行っている学習者が見られることに着目してみる。『國語中学校』の教材「クラス雑誌」には「一年生向きの笑話を排斥するのいけません。」(p.14)と記されている。大村(1982)の実践記録には「文集でなく、雑誌である、いろんな文章が入られる。笑いが入れられる。力の弱い子がいても、ちっとも困らない、何かをおもしろく書かせて必ずどこかのページにその座を持たせられる。」(p.140)という記述があり、娯楽を入れるという発言とつながっている。原倭子の学習記録に綴じてあるプ

リのクラス雑誌「第1号案」の目次にも娯楽のページが示されており、ここには学習者一人一人にかけがえのない位置を持たせる大村の教育観が表れている。

続いて司会によって、クラス雑誌の大きさとページ数、表紙、さし絵、批評欄の内容という話題が明確に示され、参加者の発言を誘いつつ、話し合いが進められている。さらに、娯楽を含めどのくらいのページを割り当てるかについて討議が進められ、具体的な結論が導き出されている。こうした編集会議を経てこのグループは全45頁の「たけ」という名まえのクラス雑誌を作成している。大村(1982)は学習指導案の単元設定の理由「5 ひとりひとりの学習が徹底するとともに、全体が一つにまとまらなければならないので、学習が社会化され、生きたものになる。」(p.141)と示しており、『國語中学校』の教材「クラス雑誌」を契機とした学習指導では、クラス雑誌の編集という言語活動を通して話し合いによってともに学びを創りあげていく実感を持たせることが目指されている。

討議の指導に関して、大村(1982)は「編集会議……絶対必要な討議、小さな発言の機会のいくらかでもある討議。」(p.139-140)と記しているおり、必要感を持った討議の場を設定し、討議そのものの指導を行うことに目を向けている。大村(1982)は、学習指導案に「5 細かい問題について話しあい、意見をまとめて、実行にまでうつしていく力を養う。」(p.141)という目標を示しており、学習活動として「クラス雑誌の意義」「他の一般雑誌とクラス雑誌との違い」についての話しあい、「クラス雑誌の名まえを決定する」話しあい、編集会議など、豊かな話しあいの場が設定されている。

学習指導案の目標と原倭子の学習記録「単元学習帳級雑誌の作り方」(1949)に記された学習のめあてを照らし合わせてみると、学習記録には学習指導案の「4 会議の進め方についての知識を持ち、そのしかたになれる。」にあたるめあてが示されておらず、学習指導案に示されている「会議の進め方」「主張のしかた」「司会のしかた」「討論会と座談会」などについて教科書とプリントによる指導が行われた形跡がみられない。

教材「クラス雑誌を作る」が掲載された『中学総合国語三』には、教材「会議はどう進めたらよいか」が掲載されていることから考えると、『國語中学校』の教材「クラス雑誌」を契機として原倭子の学習記録「単元学習帳級雑誌の作り方」に示された実践を行った大村は、実践をふまえて討議という方法を使ってほかの学習を進める場合と討議のしかたそのものを教える場合とを区別して考えなければならないこと、活動する必然性のある討議の場を設定して討議そのものの指導を行うことと合わせて、討議のしかたについての

知識を身につける指導を行うことの重要性に目を向けていったと考えられる。こうしたプロセスを経て、総合的な単元の中に明確に話しことば学習指導を設定した『中学総合国語』(1951)の教材「クラス雑誌を作る」が作成され、さらに、教材「クラス雑誌を作る」に依拠した学習記録「国語 クラス雑誌をつくる」(1952)に示された実践が行われていったと考えられる。²

4.3. 『中学総合国語』の「クラス雑誌を作る」の検討

『中学総合国語』の教材「クラス雑誌を作る」は、クラス雑誌を作った過程を具体的に記した編集日誌という形で教材が作成されている。月日ごとに編集会議の内容が示され、9月2日の編集会議の記録には編集会議で実際に中学生が話し合っていることばで記録が示されている。司会の原をはじめ、大橋、小林、中野など参加者の多くが実践記録「単元クラス雑誌」のグループ討議のメンバーと重なっており、編集会議の発言内容も、娯楽作品を入れること、クラス雑誌の大きさとページ数、費用、雑誌名など、「単元クラス雑誌」のグループ討議の内容と重なっている。さらに、教材「クラス雑誌を作る」における雑誌名の話し合いでは、「竹」がよいという提案があり、巻頭詩として示されている竹を取り上げた詩は、実践記録「単元クラス雑誌」に示されているクラス雑誌「たけ」の巻頭詩と同じ詩である。こうした点からも『中学総合国語』の教材「クラス雑誌を作る」は、『國語中学校』の教材「クラス雑誌」を契機として行われた大村教室の実践に基づいて教材化されていると考えられる。

4.4. 『國語中学校』の教材「クラス雑誌」を契機として行われた学習指導の位置づけ

大村が編集委員として関わったと考えられる教科書『國語中学校』の教材「クラス雑誌」及び『中学総合国語』の教材「クラス雑誌を作る」に注目して、実践記録や学習記録を考察してみると、『國語中学校』(1949)の無署名教材「クラス雑誌」を契機として行われた学習指導では、学習の手引きによって単元的な展開が構想され討議の指導が行われたこと、そこでは必要感のある討議の場を通して討議そのものの指導を行うことが重視され、合わせて討議のしかたについての知識を身につける指導を行うことの重要性にも目が向けられていったことがわかる。『國語中学校』(1949)の無署名教材「クラス雑誌」を契機として行われた学習指導を踏まえて、『中学総合国語』(1951)の教材「クラス雑誌を作る」では、具体的な学習の展開の中に話しことば学習指導を位置づけた教材が生み出され、総合的な単元の中で話しことば学習指導を行う方向が明確に示されていったと考えられる。

こうした考察から、大村の話しことば学習指導の形

成過程において、『國語中学校』の無署名教材「クラス雑誌」を契機として実践された討議の学習指導は、総合的な単元の中で話しことば学習指導を行う方向を示した『中学総合国語』の教材「クラス雑誌を作る」につながる学習指導として位置づけることができる。

5. 結語

大村はまが編集に関わった戦後初の中学校用検定国語教科書『國語中学校』(第一学年用1948,第二・三学年用1949)の無署名教材に注目し、同様に大村が編集に関わった教育図書発行の教科書『中学総合国語』(1951)の無署名教材及び大村による実践記録や大村教室の学習者が記した学習記録と照らし合わせて検討することを通して、戦後初期における大村はま話しことば学習指導の形成過程に関して次の3点が明らかになった。

(1) 大村が編集委員として関わった『國語中学校』及び『中学総合国語』の無署名教材「日記」に注目してみると、学習者の実態を大切にしながら、学習指導要領の記述に基づく時代の要請をふまえて単元的な展開の実現が目指されている。『國語中学校』の教材「日記」では、日記を書くことを主とした学習の中に、学習の手引きによって話し合い活動が組み込まれている。しかも、日記の内容が、実際に話し合いを行う際に具体的なイメージを持たせることができるよう構成されている。『中学総合国語』の教材「日記」では、総合的な単元としてグループで発表する活動が教材の中に示されており、総合的な単元の中に話しことば学習指導を明確に位置づけた単元が教材化されている。ここから学習の手引きによって話しことば学習指導を組み込んだ『國語中学校』における教材「日記」は、総合的な単元の中で話しことば学習指導を行う方向を示した『中学総合国語』の教材「日記」につながっていく前段階を示すものとして位置づけることができる。

(2) 大村が『國語中学校』の無署名教材「クラス雑誌」を契機として行った学習指導では、学習の手引きによって単元的な展開が構想され討議の指導が行われている。必要感のある討議の場を通して討議そのものの指導を行うことが重視され、合わせて討議のしかたについての知識を身につける指導を行うことの重要性にも目が向けられている。『中学総合国語』の教材「クラス雑誌を作る」では、『國語中学校』の教材を契機とした学習指導を踏まえて、具体的な学習の展開の中に話しことば学習指導を位置づけた教材が生み出され、総合的な単元の中で話しことば学習指導を行う方向が明確に示されていったと考えられる。

こうした考察から『國語中学校』の教材「クラス雑誌」を契機として行われた討議の学習指導は、『中学総合国語』の総合的な単元の中で話しことばの学習指導を行う方向を示した教材「クラス雑誌を作る」につながる学習指導として位置づけることができる。

(3) 上記(1)及び(2)から、『國語中学校』の無署名教材では、単元的な展開の実現を目指し、書くことを主としつつ学習の手引きによって話しことば学習指導を組み込んだ学習指導が構想されており、その後『中学総合国語』では、具体的な学習の展開の中に話しことば学習指導を位置づけた教材が生み出され、総合的な単元の中で話しことばの学習指導を行う方向が明確に示されていったと指摘できる。

以上の考察から、戦後初期の大村はま話しことば学習指導の形成過程において、『國語中学校』の無署名教材では学習の手引きによって書くことの学習指導の中に話しことば学習指導を組み込んだ学習指導が構想され、そうした取り組みを経て『中学総合国語』では総合的な単元の中に明確に話しことば学習指導を位置づけていく方向に進んでいったことが明らかになった。

【注】

- 1 橋本(2014)は「大村はま教室の「自己を育てる」教育の成熟とその成果」において、原倭子の学習記録「級雑誌の作り方」(1949)を元に考察している。
- 2 鳴門教育大学大村はま文庫には、昭和27年度当時紅葉川中学校2年1組の学習者による学習記録「国語 クラス雑誌をつくる」(1952)が保管されている。

【引用参考文献】

- 井上敏夫(1981)『国語教育史資料第2巻教科書史』東京法令出版
- 大村はま(1982)『大村はま国語教室第1巻』筑摩書房
- 大村はま(1983)『大村はま国語教室別巻』筑摩書房
- 教育文化研究会(1948)「日記」『國語中学校第一学年用三』教育図書, pp.15-20
- 教育文化研究会(1949)「クラス雑誌」『國語中学校第二学年用二』教育図書, pp.12-16
- 教育文化研究会(1951)「日記」『中学総合国語一』教育図書, pp.192-222
- 教育文化研究会(1951)「クラス雑誌を作る」『中学総合国語一』教育図書, pp.167-186
- 教育文化研究会(1951)『中学総合国語指導の研究第一

- 学年用全』教育図書, p.59
- 国立教育研究所附属教育図書館教科書研究センター(1986)『中学校国語教科書内容索引上巻—昭和24～61年度』教科書研究センター
- 坂口京子(2009)『戦後新教育における経験主義国語教育の研究—経験主義教育観の摂取と実践的理解の過程—』風間書房
- 西尾実ほか6名(1961)『国語一』筑摩書房
- 西尾実ほか6名(1961)『国語学習指導の研究一』筑摩書房
- 橋本暢夫(2001)『大村はま「国語教室」に学ぶ—新しい創造のために—』溪水社
- 橋本暢夫(2014)「大村はま教室の「自己を育てる」教育の成熟とその成果」鳴門教育大学国語教育学会編『語文と教育』第28号, pp.1-13
- 原倭子(1949)「単元学習帳 級雑誌の作り方」鳴門教育大学大村はま文庫所蔵学習記録
- 飛田隆(1983)『戦後国語教育史上』教育出版センター
- 文部省(1949)「日記から」『中等國語一(1)』中等学校教科書株式会社, pp.28-30
- 文部省(1947)「参考一 単元を中心とする言語活動の組織」『学習指導要領国語科編(試案)』中等学校教科書株式会社
- 山元悦子(1989)「昭和20年代中学校国語科単元学習の考察—教科書の単元編成の実態を中心に—」全国大学国語教育学会編集『国語科教育』第36集 pp.155-162
- 山元悦子(1990)「大村はま話しことば学習指導実践の考察—昭和20年代における実践の位置と意義」『教育学研究紀要』第2部第36巻, pp.50-55
- 山元悦子(1991a)「教科書にみる経験主義単元学習—総合教科書(昭和27年度)の分析を通して—」全国大学国語教育学会編集『国語科教育』第38集, pp.115-122
- 山元悦子(1991b)「昭和20年代中学校国語科単元学習の考察(4)—「言語編」・「文学編」二分冊期の教科書単元の分析を通して—」広島大学教育学部国語科光葉会『国語教育研究』第33号, pp.131-150
- 山元悦子(1991c)「昭和20年代における話しことば学習指導論の開拓」『広島大学教育学部紀要』第2部第39号, pp.39-49
- 山元悦子(2000)「大村はま国語科単元学習実践の研究—昭和20年代初期の実践を中心に—」『福岡教育大学紀要』第49号第1分冊, pp.1-15
- 吉田裕久(2001)「戦後初期国語教科書史研究—墨ぬり・暫定・国定・検定—」風間書房, p.496, pp.549-572, p.665